

俳句雑誌



空

令和2年11月30日発行

第18巻5号

通巻第93号



2020・11

SORA 93号

三十五句(2)

柴田佐知子

牛に馬混じり水飲む花野かな
秋高し鈍き音たて牛が伏す
繁みへと獣駆け込む厄日かな
括られて猪の怒りの収まらず
歌垣の山裾を縫ふ秋の蝶
辺りより暮れてきたりし蕎麦の花
心中の身をつなぐ紐蘆の花
したたかに草を打ちたる紅葉鮎
草の穂や負けを認めぬ子の涙
秋の日や察してゐますと犬の貌
岬まだ伸びたき形鵜渡る
大海の底の山なみ星流る
不知火に入水を勧められたると
人間の闇は底無し秋の風
卵割る音一つきり秋深し
雁渡し文や日記を焼くころか
人去れば家を呑み込む真葛原
魂の重くてならぬ夜長かな



北九州 横田敬子

ミニトマトつまめば弾けシャツの上
 城跡に軍馬の史碑や夏落葉
 少年の顎の尖りや夏終る
 使はねば枯渴する井戸柿の花
 亀の子の一生はここ城の濠

福岡 三井所美智子

朴の香や高きに見ゆる都府楼址
 予後の身をもてあましたる籐寝椅子
 見守りの刻は色付く酔芙蓉
 弘法水飲みて一息夏の蝶
 ウイルスも鳶もはびこる地球かな

兵庫 林徹也

露天湯に浸つてをれば大夕立
 天守打つ十萬石の大夕立
 覚えなき擦り傷疼く走り梅雨
 百年の酒蔵浮かぶ青田波
 錠剤をひとつ減らしぬ今朝の秋

北九州 兒玉充代

カレンダーの山も見飽きし暑さかな
 三伏の日の目に逢はぬ山の墓
 ひまはりや子の絵はいつも晴ればかり
 水底の空深ふかと根無草
 露台より青き日暮の隣町

京都 天谷翔子

水中花にも新しき朝の来て
 十字架のイエスに触るる汗の指
 花氷花の代はりにわたくしを
 思ひ出は濃くなる白きさるすべり
 立泳ぎ太平洋に尿りしこと

東京 山田正子

天の川野に目覚めたる山頭火
 天の川地球の川はあふれつつ
 黒揚羽に嫌いな花と好きな花
 一生はでんぐり返し芙美子の忌
 糸瓜忌や吾も妹を頼りとす

東京 今井康子

出水跡残る舞台や夜の驟雨
 月涼し新内流しの伝馬船
 鉄階段天の川へと続きけり
 潮鳴りの届く霊園夕焼雲
 大夕焼島影残し染めにけり

兵庫 岡村尚子

梅雨晴間島一望の天文台
 この径を行けば城跡青葉木菟
 星祭会ひたき人は皆遠し
 睡蓮の咲いて列車の通る刻
 白き腹返して蛇の流れゆく



岡垣 田中とし江

神奈川 窪みち子

丸太運ぶ山のトラック濃紫陽花

実梅拾ふ塩舐め地蔵までは坂

義兄来る夫の名しるす西瓜提げ

驟雨止む未央柳の明るくて

山滴る量り売りなる袖胡椒

草々をそよがせもせず蛇去りぬ

縦走せし青嶺を仰ぐ朝かな

武道館裏に十葉直立す

嶺嶺の風吹き上ぐる登山シャツ

雨はげし泰山木の花悠々

長崎 仲里奈央

梅を干す懐しき唄聴きながら

冷奴いつも味方であてくれて

余所行きの声は何処から白薔薇

合歡の花なりたき母にまだなれず

輪郭は父似と言はれ雨蛙



空集

柴田佐知子選

炎天やまなじり濡れて裸馬

北州 深川 淑枝

牛小屋の暗くどこかに栗咲く香

木の犁に干割れの走る芒種かな

星低く出て植糸終へし干拓田

舞ひ上がる青鷺田水したたらせ

川合の水の濁りや花樽

同じ名を代々継ぎて白緋

熊本 松田 明子

交番へ立ち寄る子ども神輿かな

流されて水輪手放すみずすまし

景気よく煙を逃がすうなぎの日

田も畑も川も一枚梅雨出水

一枚の紙一体の形代へ

曇りたる鏡拭へば汗の顔

直方 石橋 幾代

打てば反る直しても反る蠅叩

亡き母の句帳ひらけば紙魚光る

棹に巻く布に火をつけ蜂払ふ

身の内を奪はれてゆく滝の前

白南風の灘てぬぐひも青海波

くちびるを読みあつてゐる瀧の前 福岡 永淵 恵子

先生の太きぺん胼舐みなみ風

過りたる蛇の長さをくちぐちに

簾越し声かけて行く民生委員

獣鳴きさせ祇園山車ひき廻す

船上に花火師の影浮きあがる

瀬の石に匂ひ移して鮎育つ 東京 中田みなみ

父の日やかなポマードの薄みどり

ケーキ焼く平和や墓も棲みつきて

路へ出る墓を子供が叱りけり

帰省子に残る時間を告げらるる



空集抄——柴田佐知子抄出

木の犁に干割れの走る芒種かな

深川 淑枝

流されて水輪手放すみずすまし

松田 明子

曇りたる鏡拭へば汗の顔

石橋 幾代

くちびるを読みあつてゐる瀧の前

永淵 恵子

瀬の石に匂ひ移して鮎育つ

中田 みなみ

夏草に分け入る長き棒を持ち

高倉 和子

曖昧を嫌ふ少年桐の花

山内 碧

老い盛りと言ふもあるべし雲の峰

角野 良生

梧桐や妻帯の子の他人めき

原 友子

目覚むれば命ありけり遠ひぐらし

吉田 葎

虫干のネクタイ二本しづかなり

戸栗 末廣

ウエットスーツ脱ぎつつ陸へ栄螺海士

川中とし江

いつまでも他人は他人冷奴

仲里 奈央

空蟬や足掻きし羽化の跡見えず

曾根 富久恵

夕立に突つ込む新幹線の鼻

大西 乃子

蚊帳くぐり入れば父ゐる母もまた

吉田 悦子

朝餉終へ昼餉間はる夏休み

苑 実耶

草刈れば鳥の餌場となつてをり

河原 敬子

道草も野球のつづき日焼の子

森田 明成

木苺の記憶の道に熟れてをり

山本 則男

金魚一尾に子どもの多すぎる

井上 和子

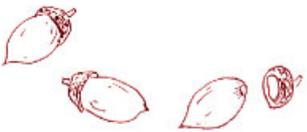
藁や電車ごつこが生業に

松尾 康代

踊る輪の指の先まで整ひし

秋津 令





滝壺が順に呑み込む元気な子

青簾世を斜交ひに覗きけり

放牛に日傘まはして近づきぬ

雪原に夜汽車の明かり流れゆく

男手と言はれ米寿が草餅搗く

風鈴や亡き母の座に犬がゐて

身ほとりの良書悪書や夜の秋

桔梗のつぼみの中の呼吸かな

梵鐘をつく間に白雨来りけり

オリックスの垂直の角初夏の風

ねぢ花と教はりすぐに覚えけり

首に蛇掛けて登場野外劇

チューリップ花を落とすも垂直に

小林 朱夏

田岡 千章

石川 子熊

山田 正子

織田 高暢

林 徹也

田代 民子

青木 朋子

佐藤 和弘

荷宮 克代

秋 千晴

今井 康子

押田 裕見子

素潜りの万の泡立つ星月夜

病得てむかし寝ていた蔵涼し

刈伏せし草の嵩減る日暮かな

田植の子泥にまみれてより楽

猫逝きていよいよ一人蟬しぐれ

兎もかくも老ゆるは辛し秋の暮

菱紅葉掻き分け子亀近づき来

古池や光を纏ひ水草生ふ

夏草の直ぐなるものの勢ひかな

馬の背の上に山なみ秋の風

梅雨入りやおしらせほどの雨となる

息凝らす子に蝶の羽化生まれり

飼ひ猫に齡を越され夕端居

坂口 学

星加 鷹彦

横田 敬子

日高 孝

岩下 きぬ代

杉本 みどり

むつ み蓮

宮川 正彦

兒玉 充代

大谷 政光

岩井 京子

窪み ち子

畑 由子

空集作品評

柴田佐知子

木の犁に干割れの走る芒種かな 深川 淑枝

「鋤」「犁」、どっちも「すき」と読むが、〈犁〉は牛馬に曳かせて耕す農具である。私の親戚は農家が多く、どこも作物など運ぶ牛か馬を飼っていた。トラクターが普及するまでは、犁を曳いて田畑を耕す牛馬は大事な働き手であった。

この〈犁〉は展示品か、或はもう使われず納屋の奥に忘れられたように置かれているものだろう。季節は稲を植える時期を言う〈芒種〉。干割れの走る犁を見た時、牛を操りながら、肥料としていた花盛りの蓮華草を鋤き込んでゆく田園風景を思い出されたことであろう。二つの季節、そして時代が織り込まれた郷愁を誘う作品である。

曇りたる鏡拭へば汗の顔

石橋 幾代

上五下七と読み下ろしてきて、さて何だと思った

らいきなり汗だくの顔がクローズアップしてくる驚きがある。そこでまた上五に戻ると〈曇りたる〉によつて、暑さで赤くなつた顔や湯気のような汗の湿り気が感じられてくる。下五から上五へと戻り循環して、更に汗臭い暑さが増幅する。平易な言葉で構築されているのだが、感覚に訴える力を持った句である。

くちびるを読みあつてゐる瀧の前 永洲 恵子

瀧の正面に立つと、その轟きで声はかき消される。それでも伝えたい。「すごいね」などと口を大きく使うとまさに〈くちびるを読みあつて〉何とか通じるものである。経験した方は多いであろう。素直な描写によつて実景がすとんと胸に落ち、瀧の轟音が聞こえてくる。

瀧の石に匂ひ移して鮎育つ 中田みなみ

独特の香りをもつ鮎は、石や岩の珪藻などを削ぐようにして食べる。その姿は水中の石などに身をこすりつけているように見える。〈石に匂ひ移して〉は鮎の生態や香りまでもを見事に描き出している。